

風の 日

薬師寺 衛

そとにはひどい風がふく

じぶんは それで ふと よみさしの

古代美術史の本から眼をあげてゐた

まいにちをさびしく きままに すごしてゐるな

こころひくものだけを ひごろ まもりそだててきたが

それに これといふ註文もなく

けれどゆたかならぬ

しんから こころをつくすあてのない 氣がする

それを まぎらはすすべも まつたく

しらぬではない ただ

なにかに きのだくなやうな とがめから

ふるへるやうな すきとほるやうな おろかな 不幸のなかに

そとにはひどい風がふく

そして そんな

じぶんが それに こころつくさうとするものを

しらないで もつてゐて

じぶんが まもりそだててきたやうなものを ひそかに いまこそ

もとめてゐるやうな そんなひとが

やはりひとり どこか あまりとほくもないところに

しづかに ゐるのではないか

きのふもけふも ゆきちがつたのではないか

これからすぐ どこかへ さがしにでかけたいやうな

それも ふしぎな氣がする けれども

ああ けれども けふは いちにち

そとには ひどい風がふく。

施與ノ圖

— 讀一遍上人畫傳

藥師寺衛

じぶんはみた

あきれるばかり おほきな

風呂桶のやうな めしびつの まはりを

非人らが かこひ つどふのを

めしびつの めしは ほかりと

おからのやうに しろく もりあがり

あたま でこぼこなる僧ら

いちわん いちわん もりたてて

さしだすところ

非人ら あるひは

はらだたし 恩にきるは くやしけれど

はらは へりたり といふやうな

またあるは ありがたや

やがて もらへるに まつほどは やれと

うしろ手をささへ しりもちをつくやうな ふりをし

さて あごをしやくり

けろりかんと あをぞらを見る よい天氣かな

またかなたに はなれてたつ

しさいありげなるひと ひとりあり
すでに めしにありついたものは
しやにむに くらひ はては
ぼろぼろと こめつぶこぼし ぼろけ
ここなるは たがひに
もえるやうな眼で なかまどち
分量を くらべあつてゐる など
かくて かれら ひしひしと
ひしめきあひ あふれるばかり まこと
その いたましさ いきぐるしさは ひとびとよ
むかしも いまも かはらぬではないか
それにしても

この 危険なる繪の作者 とほき世の
名のしれぬ ゑかきは
まなこ らんらんと かがやかせ
なみだをたたへ ひとりごちたであらうか
われこそは いき わが雙まぎの眼に
かのおどろくべき世のさまを つぶさにみた と また
われこそは ゑかきつくさん
ありとあるすがたを わが總身みのかなしみと
いかり うらみ うつたへ なかんづく
いきどほろしきばかりなる わが
この世への
かぎりなき狂愛のおもひもて。――

ノ
ア
—時に世神のまへに亂れて暴虐世に滿盈ちたりき(創世記、第六章、十一)

藥師寺衛

神よ われは狂せんとす
われはすでに地軸のひびきをさかす
風のことはを解せず
ここにわれは六百歳にあらずして
おん身のイエズスのごとくに若し
かへつて御業の啓示を
人らの眼のうちにみいだす
かれらの歡喜はまことに われに

こころふれしものらの
およづれの わらひのごとく
おん身が聖なる大洪水の あきらさまなる
ことぶれのごとくにかなし
神よ われは信ぜんとす
人らわれを石もて追ひたれば
泣き叫びつつも ひとり
みどりなる丘の邊にたちて
御旨のままに
いたくすぐなる木もて
大いなる方舟をつくる
されば まづ
おのが愛しき人をまねかんに
その人 やさしき鳥けもの
草花のたぐひをひきいれ かくて

ひたすらに御業をまたん

神よ われは祈らんとす

おん身が怒れる大洪水をして

ことごとく全からしめたまへ

われはおん身のイエズスのごとくに若けれど

肉體を惜むべきにあらず

ふたたび きよからぬを

この地にのこさざらんために

わが眼 非力にけがれてあらば

ぬきとりたまへ

わが足にして 傲りに濁り

みこころにかなはずば

たちどころに きりてすてたまへ

神よ われは訴へんとす

おん身が悲しき大洪水をしてまことに

終極いふはてのものたらしめたまへ

ふたたび われらが祖先になしたまひしごとき

不手際をかさねたまはざれ

されば わが肉體より

ありとあるけがれと力なき傲りとを

とり毀ちつくしたまへ

おのが愛しき また鳥けもの

草花のたぐひをも然しなしたまへ かくてのち

神よ いともきよく あえかなる

ひとすぢの生命いのちをのこし そのみのこして

みこころのままに 始はじにして終はつなる

御業をなせたまへ 悔あやまいもなく

いとたかき全能みことわざを舉たへさせたまへ。

詩人に献じる言葉

—田中克己氏「大陸遠望」を讀んで

薬 師 寺 衛

この道を泣きつつ我が行きしこと我がわすれなばたれか知る
らむ といふ、まことに理路の整然とした、氣品ある哀歌を

「詩集西康省」に讀んで以來、私はずつとあなたの愛讀者でし
た。あれからまだ二年たつたたぬかに、はや立派な第二詩集
をお出しなされましたことは、じつに股んな、喜ばしいことと
存じます。私は心からお祝ひをのべたいと思ひます。お祝ひす
ることによつて、私も喜びにひたりたいとねがつてゐます。暗
闇に一つ一つ灯がつくやうに、やうやく我國にも、すぐれた詩
集があらはれ、我國文化の恒産がふえてゆくのを見ることは、
私にとつてこの上ない祭典です。おもへば、そこにどれだけの
必然的條件があるにせよ、我國の詩人の社會的不遇は、たえず
私をかなしませてゐます。我國では詩が最初から、修業の手段

としてよりほか存在をゆるされなかつたことを思ひ、それに專
心した多くの美しい精神を思ふとき、一冊の詩集が出るたびに、
一般には讀まれることも少く、いたづらに苛烈な批判にあうて
再びかへりみられないやうな現状は私に、ほとんど涙をさそふ
ばかりです。私は詩の墮落をねがつてゐます。詩が一般には意
味もなく愛誦され、一部具眼の士によつて俊嚴に識別される時
の來るのを工夫しつつ待ちのぞんでゐます。その時にはじめて
我國の新詩は、安定した國民的韻律をみいだすのであらうと思
つてさへをります。一般の無意識な抱擁のあたたかさはなく、
苛烈な批判のみ詩人をまち受けるとき、私はまづ、一度はみんな
の氣持になつて、ただもうお祝ひしたくなるのであります。地
球でさへも、そのまはりには、眞空に達するまでに空氣の層を

もつてゐる。まして人間が、なぐさめられないでいいものか。

私はこんども、あなたの詩集を、一気に讀みきつてしまひました。あなたのお作は私に、それほど面白く、それほど明瞭でありました。樹が液汁をすひあげるやうに、私は息もつがずに最後の頁にまで眼をやりました。祖國の可能性を知るのに詩ほど手近なものはないと思ひ、一軒一軒古本屋の棚をあさつて、愚劣な詩集に怒つてゐた時、詩集西康省は私に一つの楽しい據點をあたへてくれました。こんどの「大陸遠望」とあはせ讀むとき、あなたが、譯詩における鵬外、敏のした仕事を、創作詩において、我々にして下さつたことを感じ、つくづく有難く思ひます。あなたの二つの詩集こそ、ひろく現代詩の土壤をなすものと存じます。西康省に歌唱や履があり、大陸遠望に *Marchen* や少女や少年や、ないしはツングースや老などの佳篇のあることは、譯詩におけるミニョンの歌や山のあなたにも匹敵して、私はここに日本最初の、ロマンツエヤバラアデの作者をみる氣持ちがして、後代の青少年があなたの詩を、いかに愛誦するかも想はれて、楽しい限りであります。早晚彼らは、ハイネやメリケを必要としなくなるでせう。それを思ふと、ぼんやりするほどうれしいのです。

せん。期待者ではそれが残酷にまでいつてゐて私にあなたの肉體を感じさせましたので興味がありました。小さい市でもそれが肉體的な怒りにまで蒸昇してゐましたので私に働きかけてきました。これらは肉體の犠牲によつて救はれてゐると思ひます。その見られないシニズムは、私には少しの興味もなかつた。シニズムは、ひつきやう、便利な自己解決の一法です。それを作品として他人にまで示すことには、私は意義を感じることができません。たとへどんなに氣品があらうとも、私たちは、作品にあらはれた自己犠牲をこそ探し求めてゐます。作者とそつくり入れかへになつた作品にだけ、私たち現代青年の興味は、はげしくかかつてゐます。どんなに手ぎはのいい頭腦明晰な自己解決も、すでに縁どほいものに感じられます。シニズムは芥川龍之介時代の、一般知識青年には、感に堪へたものであつたかもしれせん。けれども今日では、時代はもうそんな所にはないと思ひます。もはや私たちは、自嘲や自殺に感心したり、同情したりいたしません。私たちの時代とは、自段が意味なくなつた時代として、前代から識別することが出来ることさへ思ひます。シニズムは、自殺横行時代の智的玩具にすぎない。十分に良心的で、品もよく、羞恥にみちた木下杢太郎も自嘲によつて自らを葬つたと、私には言へると思ひます。あな

けれどもあなたの、事變への關心のめたれ方には、私は不服でした。終始私は反対だつた。あなたのお氣持はわかるのに、あなたが夏草でばんざいを唱へてゐられたとき、あれは日本の雜音にすぎなかつたと、私は言はねばならないのです。散文で承認されてゐるものを詩にうたはれたことを、私はとがめたかつた。詩によつてでなければ表現しえない緊張した事柄が、眼に餘るほどあつた當時に、あなたはどうして、あのやうな人工的な擬態で、つくり聲の唄をうたはれたか。みごとな出來の皇紀二千六百年の朝も、後世の歴史家に生きた史的暗示を供しうるでせうか。いな私は一年も耐へなかつたことを思つてゐるのです。あなたの事變への關心や大陸熱には、奇妙な不自然さがあります。これはあなたの理智と羞恥とから來るものでせうか。

詩集大陸遠望は、偶得といふシニツクな詩にはじまつてゐます。それは純然たるシニズムで、もはや西康省序歌のやうな哀感をもつて人にせまらぬ。そしてこのシニズムは、詩集の大部の位置をしめ、しかも私に言はせれば、これは致命的なことなのです。ほかにも、ちよつと拾つても、舊大學生の詩、やどり木、花木に寄せて、天馬海を渡るの（ふしぎなことには競馬の馬が一頭もゐない）などが眼につきまます。城址にての「しかし皮肉な小織……」はまだやはらか味があつて人を害ひま

たのシニズムが、もつばらあなたの理智と羞恥の良心的な變形であることは、私といへども、もとよりこれを感じる事ができます。それなればこそ私は、何でもお解りになるあなたに、微笑されながらも、私の氣持ちを、肉體的にでもお移し申さうと思ふのです。多かれ少かれ、私たちは他人との接觸のうちに住んでゐる。私たちの全身はつねに、他人に曝されてゐる。純乎たる自己解決などといふものは、いつの時代にもその場所をもち得なかつた。シニズムや自殺の不可能を證するため、私たちは、それぞれが自己の科學を確立せねばならなかつた。私たちはやつと、たどりたどり此所まで來た。時代は辛うじて我國でも、本格的になつてきたと思ひます。

はじめ、この感想をかかせていただくお約束をしましたとき、私はずるぶんうれしななにも、非常な困難をおぼえました。私がおとがめするやうなことは、あなたが知つてゐられるといふことが、あまりにはつきりしてゐたからです。私は稽古をつけてもらふ少年劍士よろしく、みなさんのまへで、あなたに向つてお面、お胴と聲はりあげて立ちあひ、あなたは微笑してそれを受けとめられ、私は息をはずませ、最後にお褒めの言葉をいただいて、一禮して退場するといふことになるより他ないと

和14年8月
和16年1月
和16年6月
和17年2月
和17年4月
和17年10月
和17年11月
和18年6月
和18年8月

所載
和14年2月
昭和16年
すらの
昭和18年

思ひました。それでいいのかもしれない。しかしやはりなほそれには未練があります。それなら私はたしかにお断りしたはずです。たとへ私にできることがそれだけであらうと、あなたはそれ以上のなにかを、私から奪ひさつて下さい。あなたと私のちがひ、秀才と鈍才とのちがひといふ點からなりとも、なにかを引きだして下さることが、できはしますまいか。

ここまで来て、私はほつとしました。ほんたうは、心から讚歎し、およろこびしたいことが山ほどあるのに、私はずるぶん悪口しました。自滅しないためには、私にはあれだけのことが必要であつたことを思ふにつけても、誰にともない恨みに、心もくらくになります。西康省における虎は、大陸遠望では孝感の戦、でせうが、私はかういふ史實を歌はれたあなたのお作を、特殊な愛着をもつて尊敬いたします。日本語の勁簡なうつくしい機能を目前にみせて下さつたことは、感謝にたへません。ここにはまた學識と青春との入りまぢつた、独自の魅力が感じられます。大作西康省のかはりには、こんどは詩人の生涯があります。したが、ここに私はあなたの、デイヒターとしての、我國にまれにみる天賦を感じることが出来ます。かういふ作品が、どれだけ我國の詩の可能性をひろげてくれたかは、まことに測りられないと思ひます。先にひいた *Ein Märchen* のおもしろさ、

うつくしき、あなたのロマンツエ作家としての重要さなどは、又いく度も論ぜられると思ひます。私はただ好きな作品として、ならべただけです。それにしてもツン、グリスのかなしさ、老における、能面のやうな完璧さ。海獣のなかに、私はあなたの肉體のひろがりを見ました。總じてこんどの詩集では、諷刺にもふくらみができ、幾分の安堵がみられて、私の心もやすらぎました。わが誕生日、海濱ホテルなどがそれにあたります。このふくらみが、「彼等が口をあけて歌ふとき、その口腔はうす紅い」といふあの瘦身のうつくしさから來たことを思つて、私はいよいよ尊くおもふものです。最後の墓地では、あなたの詩にして、はじめてみられる斷言していい、きびしく、かたい、理智と羞耻と決心とにみちた悲哀のリリズムがあふれてゐて、私には、もつとも貴く感じられました。これは公園でにみる「わたしは霜が置くまでと頑な^{かたく}決心をして」などの心がまへとおなじに、一たびこれに魅せられると離れられないほどの清冽なかをりをもつて、永く人々の心を動かすことと存じます。以上亂脈をきはめました失言の數々、どうか御寛容下さいませ。ますますお作のかがずが殖えますやうに。

逝ける幼児のための挽歌

薬師 寺 衛

若くて世なれぬ醫者が、まだあたたかみあるおまへの肉體から、わづかでもの生の反應をみつけよ
うと、むなしいながらに順序正しい試察をへぬまに、はやもうおまへは此處にゐない……

54

ふるやうな星をたよりにおまへは、みんなを置いて、悪戯兒いたづらっこのやうに氣ままに、せつかちに旅程を
いそぐ。もう星たちとおしやべりをしたり、きらめく瞳でまたたいたりするので、こんやは戸外そとが、
ひどくあかるいやうである……

こころの淨きよい看護婦が、おまへの臉をとぎし、兩手を胸のうへに組み、白い夜着よぎをふかく掛け、か
なしみをのべて静かにたち去るときから、おまへの小さな母の、はげしく美しい歎なげきははじまり、
肩がなみうつが、そこからはとほく、すべて繪のやうにみえる……

そのやうなおほくの、偽らぬものから、天使たちはめいめい、さまざまな音をとりあげ、みごとに
和聲わごころをつくるので、看護婦や醫者がぐつたり、眠つてゐるあひだずつと、おまへの母はそれにあは
せて、おまへへの唄をうたひながらひとり、倦まずに夜あけをまつ……

55

——ああ晝まひらいた花花がまだ咲きつき、星がながれたり、風がそよいだり、おまへの置かれて
ある部屋の、家具などもかすかに交感したりするので、こんやのやうに美しく花やいだ、みごとに
夜ふけは、たとに見られない

わが疾風と怒濤

薬師寺衛

——大晦日の夜に

おれはふとこの春の卒業のさまを想ひおこした

祝賀席上での學長の訓示はいかにも

なごやかで希望にみち 場所になほ

解剖のS博士のごとき

あの美しい童顔に眼かがやかせて

よかつたよかつたといひながら

いちいちみんなのまへに來てくださつた

夜の謝恩會ではおれも

先生方のまへでなにかわからぬ

お禮の挨拶をさせられたりした

その次の夜が おお

我らの最後のクラス會であつたのだ

あの日はみながみな酔つぱらつた

友も上氣してしづかに酔ひ

ふたりで何年ぶりがで手をと

よかつたよかつたを繰りかへした

友が一番で卒業したのだ

これはまさしく劇的效果だ!

そのことをおれは言つてやつた

これこそかつておれが泣きながら

日記の端にふかく希んだことだ
ほんたうに何もかもがよくいつて
うれしくて涙があふれた
友はなんども感謝してくれた
それにあの日はめづらしく
おれの作品への感想などかいて来て
そつと手わたしてくれた
かへりみち 雨がふり
おれは友に外套をかぶせ
濡れた夜ふけの街をうつとりと
ひとりのやうになつて歩いた
七年間お互ひが
はらはらしながらそれでも一糸亂さず來來たのは

やはりお互ひ立派だつたと思ふ
あのやうに本氣でよろこびあひ
怒りあつた友はなかつた
途中喫茶店で一ふくしたが
またそのことばかり喋りつづけた
お互ひに一流にならうといふことを
それぞれがこの學校の豫科をへ
本科に進んだときに覺悟せねばならなかつた
おれは一たび止めようと決心した醫學に
死にももの狂ひでぶつかり
友はまい日を泣き

音樂への希望を裏切られながら
海軍短期軍醫試験にパスし

我らの學校を一番で卒業した さうだ

ほんたうに危あやふいところであつたのだ

けれどももう何もかもがよくなつた

あんなにうれしいことはなかつた

やつぱりお互ひが成長しあつたのだ

ああこのことをおれはいまこそ

誰にむけて感謝すべきであるだらう。

Cogito quod sum

(又は詩人の思想)

——この小文を日本で最もあきらかな詩人思想家 萩原朝太郎先生に捧ぐ

薬師寺 衛

我々はあのデカルトが Cogito ergo sum (我考ふ、故に我在り) といふのをきくとき、一人の哲學者、さらに直接には、考へる人が、つひにみづからを、考へる人ではなくて單に一個の人間として知覺するに至つてゐたことを思ひ、人が窮極においてみづからを認めるそのあり方に、人類の宿命をみる感じがして、ふかい驚きをおぼえるのである。考へる人が考へる立場にあるかぎり、このやうな言葉はあきらかに成立しないであらう。かれはかへつて反對に私考ふ、故に我在りえずとしたであらう。かれにあつては考へるといふことは炳乎とした事實であつて疑ふ餘地がなかつたであらう。からはおのれみづからをも考へたのである。考へるといふことを成就するにあたつて衝壁となるべきみづからの肉體をも、かれは透明化したのである。みづからと他人とを區別することはかれにとつて不可能であつた。みづからのうちに特徴となるべき何らの特殊性をもかれは許さなかつたのである。そのやうなことはあきらかにかれの考へを不完全にするものであつたらうから。さうして考へるといふことにかんするかぎり、かれは疑ふことを

しらなかつたから。かくしてかれは當然の結果として、みづからの存在を、疑ふとまではゆかないまでも、はなはだあやふんだのである。しかもこのやうに生きいきと考へるのはみづからにほかならぬと感じたとき、かれは憶断した。このやうな作用はたらきにおいて、みづからは在るにちがひない、あらねばならぬと。さうしていふ、我考ふ、故に我在りと。けれどもこの言葉はもはや、いかに小聲でささやかれても我々の耳にはつよすぎる。これは考へる人としての言葉ではなくて人間の叫びである。

デカルトははたして考へたであらうか。かれの考へは完全であつたらうか。完全に考へるといふことは、はたして成立するであらうか。エドガ・ポオは、かれのユウレカにおいて、エトナ山頂から四邊を眺める人を描寫する。その人は、この風景の統一性、(oneness)を、踵ですばやく旋回することによつて解しえたでもあらうといふのである。けれども、それもまた可能であらうか。その人は、いかにすばやく旋回しても、身をかがめても、みづからが占める空間をどうしやうもなかつたではないか。風景のなかに楔のやうに割つていつた肉塊は、まさしくその人の眼をさへぎつたではないか。かれみづからの五臟六腑は、風景を押しわけてゐたではないか。エトナの山頂にたつたひとは、みづからの肉體により不完全にされた風景を感じたはずである。かれこそみづからの五臟六腑を透明化しえなかつた悲しみに涙をながしたにちがひない。風景はかれの肉體にふりそそいだけれども、かれは風景をもぎとつたのである。かれが在るかぎり、かれは風景を完全に見ることができず、したがつて完全に考へることができない、これが詩人である。さらに直接には、感じる人である。かれは我在ることを寸時も疑はない。これこそかれにとつては柄乎たる事實である。かれはまさしくいふであらう、我考へえず、何とならば我在りと。しかもこのやうに生きいきしたみづか

らの作用こそ、このまままづたき考へではなからうか。これこそ詩人の思想ではないかと、かれもまたここで憶断せざるをえないのである。しかもそれはやはり、あくまで憶断である。ここではまた感じる人が、そのみづからの立場からする言葉をおさめ、一個の人間として叫ぶのである。ここにまたしても我々は人類の宿命をみる。けれども、これこそが詩人のもちえる思想の唯一のあり方である。これこそはデカルトによつて代表される考へる人の思想に對抗しえる、唯一の、感じる人の思想のすがたにほかならないのである。Cogito quod sum (我考ふ、何とならば我在り。)

たうとき別れ

薬師寺 衛

たつたいまかとおもへる

花やいだ

美しい

まつたうするため

あの

むざんな

できごとを

おまへは

こんやひと晩をちつと

列車のなかで

決心してゐる

あのやうにさかな

はげしく揺れる

目ざめてゐようと

ああ

見送り

驛頭のざわめきや

たうといみだれ

さまざまにかかはりある

さんぜんと聚り

なつかしいひとらの

旗のなみ

ひとびとが

やがて

花びらのやうに

稀有のできごと

かがやくなさけ

あきらかな

散りばうたにちがひない

とりどりな

いきいきした

別れの花やぎ……

けれどもとりわけていま

あることの

ここにひとり

いみじさは

すべてがふしぎに

唄ごゑや

夢のやうにゆるやかに

とほりすぎゆき

とびたつ鳩かと

せきあえぬほほゑみ

さてははかない

鐵路をゆすぶる

ただひとふしの

夜をこめて

おも荷とならず

くるしい想ひも

かさなりながら

身はあたかも

胸ふくらんで

とほい望みやつめたい決心

うれひさへもがとけあつて

くるまの響さながらに

無窮旋律をかなでながら

しづかに旅程をいそいでゐる。

みなみの春の港に

薬師寺 衛

まだあけやらぬみなみの

おぼろげに

船のあはひを

黒ぶねひとつ

春の港に

鳥かとうかぶ

魚のやうな

しづかにぬうてゆく

やがておぼめく太笛

あたりしだいにあかるく

光りよわる燈臺の

朝のかがやき

さては狂ほしい鷗どりに

あけはなれば

最後のまたたきや

波のいろすでにいたく

風もはやあたたかくて

うごきだすとき

むれなす船かと

とほりゆく

わが船の

鳥々こそ

わが眼をよぎり

なかんづくここでは陽は

すばやく昇天し

まなことちれば

わがつとめさへ

さながらに

上甲板に身をよこたへて

なにごとぞ

とけゆくに似て

あすをもしらぬ夏の船路？

つよいくさ

薬師寺衛

つよくさた

ちひさなくさ

そらはあをく

ありもゆかぬ

あつらひざし

おれはするどく

たちどまり

おまへをみた

—おれのせい

か
おまへのせい

むらさきのはな

みぢかいくさ

めにもとまらぬ

そのうつくしさ

みつけたのは

おれひとり

つまうとしたが

はつとやめた

—おまへのせい

か
おれのせい

のみちゆき

なみだながれた

ああひごろ

むだないくつき

なににわびよう

けれどけふこそ

なんとしあはせ

おれのせい

おまへのせい

か
たれがしらう。

かぐろきはな

かよふものなき
せんすべしらぬ

ひとすぢみち
いかりもて

こころはげしく
まづはうれし

あゆみしが
みちのべの

あかきはなばな
われをむかへぬ

むれさきて
とみるたまゆら

そがなかに
かぐろきが

ややおとろへて
ありとみしを

あはれあはれ
ほたとおち

まなかひに
まろびてしにぬ

あなくるし
あひにけるかな

むざんのものに
まがごとと

むねふたぎ
ゆふさりの

かへりしが
こころなごみに

おもひいづれば
おとろへし

ほのになつかし
かぐろきはなや。

薬師寺 衛

わが歌

薬師寺衛

人間のかなしい性は

ともすれば

残酷なる自然を愛する

関の聲があがらうと

秋の山はうつくしい

たゞに無限に成長する植物や

物理化学の法則にしたがふ

雨滴や土壤にまぢつて

自然の一員たる人間が

なんと さまざまのことをおもふものか

けふもまた

水はうたふ

落下や激突の

雑多な源因の結果として

けれども おれの歌はさうではない

おれの歌はさうではない。

わが歌

(三八、一二、八)

いぬのふぐりといふ草を……

薬師寺衛

いぬのふぐりといふ草を御ぞんじでせうか
けふもかれらは道のべに

あなたのおぼし召により花さいてをります

その小さなあゐ色の花瓣を天にむけ

風にそよぎ顫へながら 春のはじめから

ひと目の餘 勞せず 紡がず

咲きついでをります ああ

これらは世のいかなる破壊者の

いのちをはる日にも地にみち

蝶や小蟲のたぐひはそこを訪れませう

けれどもわたくしの念願は冬にも

夏にも煩はされぬ大らかなたましひを

日々にもち かれらにも あなたにも

美まれる身分となることです

— 世のいかなる破壊者よりも力づよく。

き、しばしば讀者が口にする事柄ではあるが、私の場合にはややちがふ。棟方志功の神的なる口繪・装釘および著者の挿繪等が、云ふべからざる氣韻を添へてゐることはもちろんであるが、そのことは別として——乃至はそのことをひつくるめて、やはりかういふ詩集と詩人が存在すべき精神的背景を私は言ひたいのであつて、田中・伊東・藏原を先達とする、しかも獨自な新風の確立を、コギト・日本浪漫派の駁々乎たる勝利のために慶びたいと思ふ。

かやうな心理の契合なくしては、今日三十歳を生きるわが詩人のはるかな悔恨のしらが身に沁みぬ。その滑らかな主旋律は、たえず何度か低いカノンの流れを伴つてゐて、私らを懐古的になうつくしさを誘つていく。そして、ほとんど飄々たる無想念と紛ふばかりの見事に大様なフウゲ形式を完成してゐる。私はこの詩人の雅純の風格を知るゆゑに、いつか最高のものに通ずる聲調を想つて心たのしい氣がする。コギト詩人はつねに最高を詠つて來たし、爾く永遠に最高をうたひつづけるのである。

事で、顔つきは麒麟兒なのに指が一本足りなくて、案外平氣である所に、作者の人間の魅力があふれてゐる。それは作品に刻印され、通巻すこぶる活氣と誘惑とにみちた成果ををさめてゐます。これは確に、コギトが誇つていい仕事であると存じます。簡單ながらお祝ひまをしあげます。最後に私が作品鑑賞にあたり、志をおさへて、むしろ日本語法に拘泥したことを、コギトの評家がふかく尤めず、少しく御参考下さつたら望外の倅であります。小高根さん、おめでたう。

「はぐれたる春の日の歌」に寄せて

江頭彦造

「若さ」の潮流の感じられる詩集である。「若さ」は「あこがれ」である。男らしさへの、女性への、母性への、清純さへの、幼年への、ふるさとへの、宗教への、

ますらをの歌

薬師寺 衛

由來藝術は、男性と女性とを併せもち、植ゑつけ、孕み、育てるたちの人々によつてなされる人類祈禱であると思ふのに、コギトの詩人と批評家のうちには、多分に男らしさのかつた人々があつて、わが小高根二郎氏もその一方の代表であるやうです。詩人はその女らしさから、些少の経験もえ捨てずに、それを整理し、回顧し再生する運命にあるのに、この作者は自在に捨て去つてゐる。この詩集の珍らしさは、むしろかかつて其處にあるのではないかと思はれます。その意味でますらをの歌であり、剛であるが時に脆いのであります。志や植ゑつけた精魂の大部分がつかはれ、孕みや育てにやや粗であるためか、あたたら天來の妙句が一字の文法上の誤用によつて死んでゐることが無いではありません。いかにも男の仕

「あこがれ」である。あこがれは潮のやうに流れる、高く、低く、清く、また濁つて……。あこがれは息吹となつてゐる、それがそのまま歌となる。人は知らず知らずにつれ去られる。瑞瑞しく開け或は暗く渦巻いて。しかし快い甘い悲しみにまとはれて。

「通天閣にて」この歎きは最も美しく沈んでゐる、生き方の久しさの故に。「はぐれたる春の日の歌」甘い美しい幻想である。悲しみである。「邂逅」幼い愛情である。「菊に寄する唄」清らかさと飄逸との唄である。多くの唄はそれぞれのひびきで呼び合ふ、あふれあふれる思ひにみたまされる、人はつれさられるままにつれさられるがよい。

……未完成はまぬがれない、いくつかの唄に、丁度「若さ」と同じやうに。高すぎるしらべもあるであらうし、しらべの傾いてゐるものもあらう、しかしそのすべてをおほひつくす Pathos である、これこそすべてである。忘れられない唄のひとふしは唄ふひとにのみきかれる。

……鷗は渚に鳴いて とめどもない
ああ かくわれは二十年の後の日
故郷に目覺めぬ

しやうが姫

—ダガログ俗謡—

薬師寺 衛

ちよつびりこしやうが

うゑまうしたが

めをだしやつくね

みのればまんど

かぎなげかけれや

なむさんばばや

ゆすればおちて

みめよいをとめ

いやぢやよいやぢや

そなたにやほれぬ

むこがねたんまり

おとりぢやものを

よごとひひとり

なのかめにふたり

まつりにいなし

かうたんさいにかへす。